慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ミルの死
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.8 (1923. 8) ,p.1453(113)- 1469(129)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230801-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アヒムの豫言と相違する、即ちこの豫言に從へば皇帝はその事業を完成せずしては此の世を去ることが出來ないのである。茲に於てかフリードリッヒ二世は死んでゐる筈がない、彼は再び起つてその殘れる事業を完成するであらうとの迷信が起つた。……しかるに後人は之を皇帝フリードリッヒ一世(バルバロッサ)と考へ違ひをしたのである」。(H. Prutz, Staatengeschichte der Abendlandes im Mittelalter, Berlin 1885, I, S. 657.)(一八五)。

八七、共産主義的革命の信仰——フリードリッヒ二世の再起する時、共産主義的革命が行はれるであらうとは獨乙民族の信仰であつたのである(一八六)。

附記、余は引續き此の種の資料數篇を發表し、余が考へんとする問題に就ての文獻の解釋並に研究方法一般に就て先輩各位の是正を仰ぎ、しかる後時期を見て、此の問題に就ての余の研究と考案とを世に問ふつもりである。(一九二三、三、一九)

ミルの死

榎本鑛治

はしがき

一人の非常に奮鬪せる、又豁達なる人物が、ローン河の邊りアヴィニョン(Avignon)の墓所に長へに眠りし以來、既に二十餘年は過ぎ去つた。あの莊嚴にして悼ましき陰鬱なる場所の翠深き松の樹蔭に、さうして彼の愛妻の側に、ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)は眠つて居る。實にや彼は、最も熱心なる勞作者の一人であり、又現代に於ける最も端正なる人物の一人であつた。時代其物は刻々に流れ去りつゝあるは、吾々も認めなければならぬ。——恰かもローン河が絶えず大海へ流れ行くが如くに。さう

は茲に於て始まるのである（一八四）。

八二、ヨアヒムの影響――ヨアヒムの教義は非常なる影響を及した。特にそはフランシス教團中の硬派フラティチエリに於て甚しく、此の派は「正義者の教團」に加はり、之よりして更に四方に弘まつた。かくて此の教義は伊太利のミユンツエルとも云ふべきドルシノ Dolcino を感化し、ミユンツエル自身にも亦無關係ではなかつた（一八四）。

八三、ヨアヒムとミユンツエルとの關係――ルーテルはミユンツエルが、その「不遜なる思想」をば長老ヨアヒムの「エレミア記」註釋より藉來つたことを非難した。ミユンツエル自身彼とヨアヒムとの關係に就て一五二三年十二月二日ツアイスに書を送つて述べてゐる。曰く「世の腐儒は余の教義を以て長老ヨアヒムより藉來れるものとなし、之を嘲弄して永遠の福音書と稱した。しかれども余の教義は其れよりも長きものである、即ち余は之をヨアヒムに取れるものに非ずして、神の託言によれるものである」（一八四）。

八四、ヨアヒムの豫言――ヨアヒムの豫言の影響は伊太利に於てのみならず、獨乙に於ても極めて深刻にして、且つ極めて痛切なる民家の要求に應ずるものであつた。彼豫言して曰く、社會革命は一二六〇年迄に結了すべしとこの時に至つて法王廳と皇帝フリードリッヒ二世の間に激烈なる爭鬪が起つた。而してヨアヒムの信奉者は皇帝が法王を屈伏せしめて、新なる社會を創始することに成功せんことを期待した（一八五）。

八五、事實の經過――しかるに事實は正反對となつた（一八五）。

八六、皇帝フリードリッヒ二世不死の說――「フリードリッヒの死（一二五〇年）はフイオレのヨ

即ちモーレイは、次の如く記したのみで、餘り多く語らなかつた。即ち『一つの強い純な光りは消えてしまつた。夫れは清い幻影と仁慈の目的との光りである』、及び『吾々は知及び德の一大先生、一大典型を失つてしまつた、』是れである」と。(F. Harrison, Tennyson, Ruskin, Mill, etc., P. 285.)

一

墓と云ふ悲劇的な日常語も、吾々が人類への偉大なる奉仕者の一人を弔ふ時には、頗る意義ある調子を響かせる。一つの強い純な光りは、消えてしまつた。夫れは清い幻影と仁慈の目的との光りである。非常に深奥な事に於ける新らしい心意的刺戟を以て、彼等の時代を鼓舞するために折々出現する偉人の一人は、吾々の間から失はれてしまつた。

自然律は道德律に關係なく作用すてうことを

彼の時代の人々に印象附けるために非常に努力した人は、今やなし。彼の死がより力強く指示する所は、公正の人に取ても、不正の人に取ても、一の終局があり、又同一の狹い墓が、自然即ち境遇に依て卑賤なる地平線の中に幽閉された人の死を待つと同時に、高遠なる理想を抱き、感動を示し、高尚なる理性を有した人の死をも待つと云ふことである。夫れは、永久に古く、而も永久に新らしい天命である。併し吾々の非常な悲しみも、其出來事に於ける或偉大と嚴肅とに依て、和らげられはする。何故と云ふに人を敎へる者は、極めて少なく、又知的に父たる資格を賦與される者も甚だ稀であるから、夫れは、斯樣な稀有の光榮に依て、圍繞される譯になるを以てゞある。

勿論偉大なる政治家の死、若くは文學や藝術に於ける巨匠の死は、吾々に種々の強い悲しみ

して時代は、此哲學者を彼の永遠の墓所に靜かに横はらせてしまつた。「余が事業は終れり」とは、彼の臨終に殘した言である。(Frederic Harrison, Tennyson, Ruskin, Mill, and other literary estimates, 1899, p. 285)

右は、フレデリック・ハリソンのミル追想の一端である。今日は、ハリソン執筆當時を距ること三十餘年、溯つて一八七三年五月八日南歐のアヴィニョンに於てジョン・スチュアート・ミルが不歸の客となりし時より起算すれば、本年は正にミルの五十回忌に相當する。依て私は茲に、ミルの弟子として知られたジョン・モーレイ(John Morley)の一文を譯出して、極東遙かにミルの冥福を祈らうと思ふ。モーレイの論文は、彼がミル死去の報を得るや、直ちに執筆して、隔週評論(the Fortnightly Review)誌上に掲げ、以て哀悼の意を表したものである。題して「ミル氏の

死」(Death of Mr. Mill)と云ふ。今は收めて、彼の「論集」第三卷(Miscellanies, 7th. edit., 1913, vol. III, pp. 37-51)中に在る。

尙はミルに反對の立場に在るフレデリック・ハリソンは、ジョン・モーレイの右の論文を評して曰く。「……ミルの親友と雖も、彼が今より三十年前に的確に握つて居た其勢力と其名聲とを彼のために今日敢えて要求しないであらう。否、今日ジョン・モーレイが一八七三年ミルの死去に際して執筆せる立派な二文——"Death of Mr. Mill." と "Mr. Mill's Autobiography." 共に前掲「論集」第三卷中に收めらる——中に述べた事實には、全部其儘同意する者は尠なからう。モーレイの貢獻は、假令一個の友人にして、又指導者たるミルを突如として失つたがために、稀有の情緒と悲哀との深淵に陷つた點はあるにしても、兎に角實質的には公正にして、眞理である、

ミル氏は、彼等の思考しなければならなかつた幾多の問題を解決したのである。

過ぐる二十年の間に於て、大なる知的印象を受ける者は、總てミル氏の影響を蒙らずして、牛津を離れることは出來なかつた。併し彼等が絶えず新らしき空想に熱中して居るあの灰色の寺院には、氏の高位が依然として動かずにあることは、恐らく言ひ過ぎであらう。牛津其他の大學に於ける講座は、次第〳〵に氏の原理に訓練された人々の受持つ所となりつゝある。總ての大學は、社會に於て最も修學せざる部分に及ぼした氏の影響を證明するに過ぎない。

有力なる新聞記者は、氏の著書に依て獨學したものであり、又平凡なる連中と雖も、氏の著書より引用する習慣を有したものである。

ミル氏こそ、高尚なる抽象的主題に關する著書が其生存中幾度も重版され、且汽車讀み小說の價格で賣出された所の、世界に於ける唯一の著述家である。各國人も、英國に於ける氏の最も熱心なる弟子と同じく、氏の著書を精讀して、恰かも氏が天賦の賢哲であつたかの如くに、非常な尊敬を以て、彼等自身の問題に關する氏の意見を求めたのである。現に、公務を帶びて渡航して歐洲各國の大政治家に接近したる或有名な米國人は、私に(即ちモーレイに)向つて曰く、

「余が最も强い印象を受けた人物は、スチュアート・ミルであつた。即ち貴下が、彼の意見を求めやうとて、樣々の事實を彼に提出した。すると彼は、先づ夫等の事實を會得し、次に夫等が公平に觀察せられ得る各種の方法を貴下に敎へ更に反對の考察と比較し、然る後に萬々遺漏なき最終の斷案を貴下に與へた。彼の心情は、さながら一個の精巧なる機械の如くに、働いた。詳言すれば貴下が、原料を其機械に供給すると、

を感ぜしめる。而も敎へる人、殊に才能者であり、有德者であり、加ふるに才德の何れにも非ずして、彼の後に多くの人を引連れる不思議な秘密を與へる或何物かを握る人の死は、夫れにも增して深奧なる意味の空虛を殘すものである。併し其哀哭は、其場合に於ける一種の神聖さに依て、和らげられ、輕められる。

ジョン・スチュアート・ミル氏と交際を結べる人、而して常に弟子としての親愛なる尊敬を心に留めなければならぬ人は、勿論最早ミル氏に會へないと思ふ時に、悲痛を感ずるであらうが、彼等は、ミル氏の仕事の高尙であり、又氏が其仕事に確かに成功したと考へて、高尙な心持になるであらう。假令非常に豐富な敎養、非常に完熟した知識、眞理と正義との熱望等は、今や此一打擊に依て消滅したと考へることが悲哀であるにせよ、少なくとも吾々は、彼等が生かして用ひ居る所の立派な目的と、新らしき誘心物に取卷かれつゝ、利他的大量の人と共に堪忍的に正確に思考すると云ふ困難なる傳統とを考へて、其處に或價値ある慰安を見出すであらう。

二

ミル氏の哲學的原理の正確なる價値、辯證家としての氏の成否、批評家解說者としての氏の熟練等に就ては、何時かは必ず語られなければならぬのである。併し此吟味が如何樣であらうとも、兎に角英國の全時代の知的名聲は、必ずミル氏の名聲と共に維持されるか、若くは失墜するに相違ない。死が老鍊家達を薙ぎ倒すために、今や第一線に立つに至れる優秀者は、氏の弟子なりと發表すると、或は氏の反對者なりと宣言することを問はず、總てミル氏の感化を受けた根痕を殘して居る。假令彼等は、ミル氏の思考方法を認容しなかつたにしても、少なくとも

夫れは貴下に、一個の完成品を製出し與へると同理である」と。然り、英國は、斯の如き人物を誇りとす可き充分の理由がある。

三

ミル氏は、多くの點に於て、著しく英國人の良質を帶びて居た。氏は明かに、ロック、ヒューム、アダム・スミス、及びベンサム（John Locke, David Hume, Adam Smith, Jeremy Bentham）——氏は之にジェイムス・ミル（James Mill）を加へたが——の名が一筋に連續する英國哲學派に於ける最近の驍將である。抑も此學派の研究方法は、想像を觀察に從屬させ、而して其主義は、知識の基礎を經驗に置き、又行爲の標準を效用に置くものである。

併し之にも拘はらず、ミル氏の最も顯著なる特色の一は、氏が英國的に非ずして、佛國的であると謂ふことに在る、即ち氏は常に、社會的思辨に於て一個の理想的想像的要素を是認し、而して若し社會上の取極に依て自由の機會が與へられさへすれば、人間の努力と、智慧と、敏捷とは、人間の運命を現在吾々の概念力の及ばざる點に迄引上げることが、出來ると云ふ熱烈なる意見をも是認したのである。思ふに氏の卓越せる一切の總額は、嚴正の科學と無限の高志と、即ち實在的であり實際的であるものゝ嚴正なる意義と、赫々と輝ける希望とを、斯く結合した所に存する。

或人が、コンドルセイの「チュルゴー傳」（Condorcet's Life of Turgot）に就て物語つた所、ミル氏は其仁に告げて曰く、「余は、若い時に兎角落膽し勝ちになるので、常にチュルゴー傳を一讀して、余自身の平靜を得たものである」と。其仁は、嘗てウェストミンスター（Westminster）に於てミル氏が落選したことゝ、ルイス十六世（Lewis the 16th.）が偉大なる宰相を罷免したことゝを比較公表したことがあるが、其仁に對してミル氏は曰く、「余は未だ嘗て、余をチュルゴーと比較するが如き結構なる稱讃を受けたことはない。斯く同一に視ることは、貴下に對して當然起らなければならぬとは、洵に余の光榮とする所である」と。あの嚴正なるオースチン（John Austin）でさへ「神の如きチュルゴー」と呼ぶ可き價値ありと考へた人物（即ちミル氏）の性格を研究した者は、何人でも、斯る典型の貴くして稀なることを知つて居る。

斯る性格の威力は、唯一の要素中に存在するものではなくして、實に人類の改善てう切なる興味と、人類の境遇の法則に對する論究的注意とを結合したと云ふ點に存するのである。是れ丈けは、智慧と云ふ美名を以て厚遇される價値がある。斯く完全に具備したればこそ、ミル氏の魔力の一は、單に青年のみならず、又氏の著書を讀む程に强烈なる知的興味を有する——比較的に少數ではあるが——婦人をも吸引したのである。

ミル氏は、日常生活の砂塵が夫れを曇らせるか、或は消してしまう迄、最善の天性に自然である所の大量なる道德的熾熱に滿足すると同時に、驕て社會の仕事をなすに至る人々の若い氣質に顯著である所の合理的性質にも滿足したのである。斯の如く知的嚴肅と、生活の目的及び道具に於ける改善の情性的好愛とを混同することは、若し然らずんば、一面に於て忌味ある衒學に陷り、又他面に於て口先ばかりの有害なる博愛に墮し終る所の幾多の理智をして、活動させたのである。即ち氏は、凡庸の賢哲たるを全然脫却し得たる事實を、示したのである。氏は現在の諸實在を忘れずして、將來に期待するこ

ずして、明白の事實である。かの、人々を誘つて假言的告白をなさしめる所の、悲しくも共通なる、又罪ある怯懦たるや、常に氏の深く嫌忌した所である。而して氏は、一個の無神論者として下院へ送られる際に、(即ち一八六五年の總選擧の際に)氏の主義を公然と宣言するを恐れなかつた。

氏の勇氣は、忿怒立腹や危險の無識や輕率浮薄や無鐵砲の信賴等より起る、云はゞ僞物ではなかつた。是等より起る勇氣は、何れも至極容易である。氏の卓越した所は、氏自身に迫る總ての危險を知悉し、他人に對する苦痛の救助を渴望し、世界が一擧にして永久に改善さる可きであると云ふ輕率なる希望に依て支保されなかつたことである。併し之にも拘はらず氏は、如何にすれば多數者に向つて勇敢に構へ得るかを知つて居た。

氏の知れる唯一の恐怖は、大早計の若くは過度の言が善良な目的を阻害することなきやを恐れるに在るのみ。即ち氏は、人々の諸種の偏見を測定した。而して或改善の有效的唱道と相容れる最小の程度に於ても、右の妨害力を惹起す可き恐れのあることは、軈て氏の勇敢に唯一の限界を置くことになつたのである。ミル氏に取て偏見とは、諸君が依て以て判斷す可き自然的素因の如きものであつた。

氏は亦、世人が屢々性格と生活とに於ける最も價値ある要素に束縛されることも知つて居た故に氏の恐れたことは、所謂猛烈なる外科的手術である 何故と云ふに夫れは、謬見を根絶すると同時に、夫れに纏はる所の眞實健全なる感情をも損傷するかも知れないからである。或者に、取ては一の本能であり、又他者に取ては無頓着に對する美名となる所の忍耐は、ミル氏に取て

とが出來た。氏は、知識の社會的目標を認識して、常に氏の眼前に在る社會的實在の大藝術の向上をば、凡ゆる思辨的活動の窮極的目標として尊重したのである。

四

他面に於て此稀有なる結合は、ミル氏の勇氣と忍耐との結合であり、又確乎たる國教不信と無言の國教信奉との結合であつた。順從することは、常に時間、事情、及び主觀の三者に依存する程度の問題である。ミル氏は、臆病なる用心と放恣なる無謀とを等しく退け、正確なる中庸を執つた。即ち氏は、極めて民意に適はざる新奇の意見に對しても、出來得る限り之を擁護し、又之に同情すると云ふ至難の藝道を行ふに到底他者の追從を許さなかつた。故に氏は、鋩にボタンを附けた試合刀もて鮮かなる劍舞を演じて、新らしき信仰を弘通するに努める底の人物でもなければ、又俗像や談像や傳像（the idols of the tribe and the market-place and the theatre）の中に無茶に飛込むやうな人物でもなかつた。氏は、氏の攻擊する確信を持つ人に對して、彼等の精力を毫も刺戟せずに、氏の推論が概ね說得の效果を擧げる場合には、如何にせば彼等の精力を動かし得るかを心得て居た。

斯くて氏は、眞理の力を節用し、又無益な軋轢を避けたのである。思ふに今迄に於ける英國の著述家にして、ミル氏程多く神學的精神の根元を斷ち切つた者はあるまい。而も尙ほ氏の生存中公刊した著書――「自由論」を指す――中には、唯だ一つ衆知の文句がある。夫れは、最も熱心なる讀者に取てすら、多少立腹させられる種となるのである。氏の國教信奉は、決して否定的程度以上にも進まざれば、又決して無言の國教信奉以上にも赴かずとは、先づ何人も言は

い。併し此感情の眞實公明なることは、軈て氏の心情をして、奢侈的人爲的社會の虛僞の威嚴を嫌忌する念に充溢させるに至つたのである。故に氏は、傲慢と苦難とを持たずに、誤つて社會的義務と名附けられる在來の交際を避けた。又氏は、無禮と嘲笑とを持たずに、上流社會に行はれる道化芝居の舞踏に於ける役割を演ずることを拒絶した。ミル氏に於てこそ、異常の學識に加ふるに、確乎不動なる自尊の賜物があつたと云へるのである。――而も此兩者は、不幸にして常に必ずしも相伴ふものではない。

氏は事物の實在を感得した。而して氏の面接を得るは、貴族の夫人に取てよりも勞働者に取て容易であつた。英國社會に於ける生活の價値なき概念を助長するに頗る役立つ所の、上流階級の不思議なる魅力に動かされない人々が居ればとて、夫等の人々は常に必ずしも、總て吾々は一身同體であると最も感動的に物語る者とのみは云へない。而して世人の多數は、ミル氏の社會的原理と、夫等原理中に於ける理論的系論とを認容し得るにも拘はらず、而も彼等は常に夫等の原理に從て氏が男々しくも眞正直に振舞ふことと、氏の言行が峻嚴なる程一致して居ることゝを非難するのである。又道德的自墮落に就て餘りに共通なる傾向を吾々一同が有し、且惡に對して微弱なる抗議に意氣地なくも滿足することは、氏の經歷に依て一個の不斷永久的譴責を受けることゝなるのである。氏が一大犯罪人なりと思惟せる或官吏を裁判に附せんと、氏をして久しきに亘りて一歩も讓らず努力させた所の正義に對する制御し難き情性は、ミル氏をば、十七世紀に亘る吾が歷史に於て最も剛勇なる愛國者の一人に數へしめる價値があつた。之と同樣なる道德的完全性は、最近の事件に於て

は理性と良心との取得物であつた。

五

勇敢と寛容、即ち雄々しき言論と勇力ある控目との賢明有德なる此混交の價値は、莫大なるものであつた。其結果は、思想の自由と言論の自由とに對する氏の直接的擁護と共に、英國に於て何等の社會的迫害を蒙らずして、民意に適はざる意見をも發表し得る自由の主要源泉となり、遂に夫れは、氏自身の驚異とする程に、今や殆んど完全となつたのである。

氏の辯證方法は、其內容に於てこそ强固であつたけれど、次第〳〵に緩和的要素を其見解の要圍氣中に導くに至つた。勿論英國に於て目今流行する自由討論の非常に寛大なるは、一部分――私（即ちジョン・モーレイ）は、夫れが必ずしも完全であるとは思はぬが――世に行はれる懷疑說、無頓着、及び或る高僧の感化に基づくものである。併しミル氏が、氏の駁擊する見解を抱く人々、若くは階級に對して、概括的の攻擊を斷然差控へたこと、氏の寛大なる公平率直、氏が如何なる人々の間に於けるを問はず、總ての善の幼芽を注意深く尊敬したこと、及び氏が非常に斟酌したことは、若しさうでなければ道德的停滯より生來する消極的寛容になるかも知れない所のものに、積極的要素を貢獻したのである。他人の提唱する厭ふ可き意見を寛容することは、氏の人格に於ては吾々自身の見解の眞理を最も擴大すると同時に、又最も確信すると云ふことになつたのである。

更にミル氏の經歷は、吾々の社會に於て最も墮落した或連中に對する、最も單純にして最も高尙なる種類の抗議であつた。人類生活に美德と威嚴とを附加へた一切の價値のために生存すると云ふ點より觀れば、氏に優る者は一人もな

底の普遍主義には、毫も陷らしめなかつたのである。

或偉人は、目立つて堂々たる權威の力を以て吾々を捉へるものである。彼等の思想は想像てう印象を與へ、彼等の言葉は高飛的であり、又豫言者としての彼等は反駁されぬ立派な證據を握つて居る。例へばボシュウエイ(Jacques Bénigne Bossuet)やパスカル(Blaise Pascal)の如きが、此部類に屬する。

然るに他の偉人——ミル氏も其一人である——が弟子を得るは、威風凛然たる權威に依るには非ずして、寧ろ中庸なる非人格的種類の說得に依るのである。即ち氏は、高貴なる先生としての偉大と力とに對する吾々の感覺に賴らずして、尙ほ一層高貴なる、吾々が自身に眞理を發見し、且之を服膺するを愛好すると云ふことに訴へるのである。從て先觸と喇叭とを以て布告する國王の如き先生を好む人々には、恐らくミル氏が興味なく思はれやう。併し斯の如く氏自身の人格に於て慣習的に甚だ卑下したことは眞理の神聖なる淸淨さに對する氏の敬虔なる態度に於て、一の鮮美にして稀有なる色彩を表示したものである。

七

或時代に於ける智と善との第一の指導者たる人物の影響に就て想考せんとするも、彼の死が吾々に始めて知らされたる其瞬間に於ては、其想考は速かに消え失せるものである。即ち夫れは一轉して感傷的回想と變ずるもので、寧ろ沈默する方が遙かに夫れに相應はしくなる。斯る瞬間に於ける思考は、吾々の弔ふ先生の仕事よりも、寧ろ先生の人格に及んでしまう。吾々の回想する所は、氏の淳樸であり、氏の溫厚であり、氏の英雄的克己であり、氏の豪俠なる鼓舞

も同じく氏をして憤怒せしめ、而も氏をして次の如く宣言せしめた。曰く、「瓦斯會社の火夫に對する不正なる宣言が下されるや、否や、直ちに棄却されないと云ふことは、政府に取て一の永久的不名譽である」と。

六

氏の最も顯著なる資質は多く、目標の或卓越さを喪失し、或は長期に亘る過去の努力に依て到達された所の眞理と權利との標準より或點に於て逆行し、若くは道德的理想の極度に於て後退する底の傾向が、社會に絶えないために、ミル氏が生存して居たのであると云ふ其例外的程度に基づくのである　即ち吾々の義務の概念を改善し、又夫等の概念を實現するための外部的方法を改善するに、飽迄も努力することに依てのみ、過去の時代の取得物が保有せられるとは、氏の鋭く感知した所である。而して生活を改善するには多大の努力をなさねばならないと、氏は會得した。

茲に於て氏の認めた凡ゆる智的政治的團體に於て、氏は、眞理と權利との氏自身の觀念を發揚すると同時に、善良なる社會的感情に似たものゝ收得に熱中したのである。更に又總ての主題に於ける新觀念と、道德的社會的見地に於ける獨創性との束縛妨害なき發展に對する氏の情性は、猛烈になつたのである。何故と云ふに、輿論に依ると將又他の如何なる方法に依ると問はず、抑壓することは、莫大なる利益を人類に與へる底の賜物を巨多に浪費する方法となるかも知れないからである。氏の悟性の訓練と其力とは、殆んど氏の判斷をば、所謂物知り振りの夫れと別異のものたらしめ、以て氏が最小の善良なる要素をすら奪はれないと欲したにも拘はらず、氏をして、或他の善人をも無力にする

希臘風が不適當であることゝを證明するのである。總ての點に於てシルレル（Schiller）の方が遙かに優れて居る、即ちゲーテよりシルレルに轉ずることは、恰かも溫室より新鮮なる戶外へ出るやうなものである。

次に文體に就てはゴールドスミス（Goldsmith）が一番で、アディソン（Addison）が之に次ぐと云ふ。ジュニアス（Franciscus Junius）やキボン（Gibbon）の文體は、ミル氏の甚だ好まぬ所である。キボンに就ては、彼の研究を除けば總ての點に於て拙劣であると考へられるが、彼の研究のみは、前世紀の著作中にて十九世紀の批評を受けるに足るのである。ヂョーヂ・サンド（George Sand）の文體が散文の絶頂であると云ふ私の見解は、ミル氏と一致しなかつた。併しミル氏も何人がサンドに勝るかを斷言することは、出來なかつたし、又女史の散文が讀者の耳に音樂の如く響くと云ふことは、氏も是認した所である。

愛蘭大學問題の最も實行可能なる解決策は、一種の加特力大學設立に在るとミル氏は考へて居るやうであつた。即ち愛蘭に於ける制限的非開化的傾向に就て君の豫期し得る所は、より開化せる制度の下に教育された人間と、實際上生存競爭が出來ないと謂ふことである。愛蘭の自治に就ても語つた。

痛感的否定論者たるジェイムス・ミルの如き人と比較して、近代的基督教信奉拒絶者の感謝に於ける相違を物語つた。彼等の信じた所は、若し諸君が價値の力を弱め、且迷信を妨げたならば、萬事は好都合に行くであらうと謂ふのである。是れは、佛蘭西革命が教會を倒したるにも拘はらず、尙ほ所謂一千太平年の到來しなかつたことを見て、半ば彼等が喚起した一種の夢想

であり、氏の敏速熱心なる救助であり、氏の暖味ある挨拶であり、氏の友情に輝く双眼である。

ミル氏と私との最後の會見は、氏が英國を離れる數日前、即ち一八七三年四月五日のことである。此日氏は、私を郊外に訪れて一日を送つたが、其日の有樣は、私が一友に宛てた次の書翰中に略述されて居る　即ち

「ミル氏は、朝の汽車でギルドフォード（Guildford）停車場に着いた。其處で私（即ちモーレイ）は、彼を出迎へた。氏は頗る上機嫌であつた。吾々二人は、悠々と磯路をして約四時間許り散歩した、散歩した所は、君も知つて居る、あの樹木の繁茂した舊道や、杜松（ネズ）と水松（イチヰ）とで繪のやうに美しい白堊の凹地や、荒地や、共有地等である。次に風の強い岬に上つた所氏は、見事なる眺望に大變喜んだ。御承知の通りミル氏は、熱心な植物研究家であるから、約十分許り腰を曲げて、彼方此方と路傍を注意した。併し私は殘念ながら植物學の初歩すら知らないので、氏の話は一向私の興味を惹かなかつた。

勿論氏は大いに語つた。ミル氏は、ゲーテ（Goethe）が人生に新見地を開いたことを是認したけれど、氏の道德的性格上非常にゲーテを好まないのである。即ち氏の訴る所は、ゲーテの『ウヰルヘルム・マイスター』に於けるアウレリア（Aurelia in Wilhelm Meister）と云ふ女性に悲哀を感じさせ、男子が、何故に女性に對して斯くも整然と惡行をなさねばならなかつたかと謂ふに在る。ゲーテは、希臘人たる可く出來得る限り無情らしく描寫したが、一二の抒情詩を除けば、其結構に於て何等完全なる所がなかつた。此失敗は、近代的精神に抵抗し難く之を展開したこと丶、行爲及び表現の近代的必要に對して

感謝の情操を滿足せしむる、とが出來、且彼等の承繼せる無數の恩惠に報復することが出來ると、世人は漸次に感ずるであらう。

其他種々興味と暗示とに富む、例へば吾々の食事や、子供の可愛らしさことや、野生の草花や、昆蟲の動作や、鳥類の音色やに就て、ミル氏は話した、氏は夜鶯の囀聲を根氣よく聽いた。夫れより私は、氏を案内して小さい路傍の停車場に赴いた。私の生涯に於て最も愉快なる日の一も、斯の如く歡喜と悲哀との中に過ぎ去つてしまつたのである。」

噫々、吾々の歡喜に常に附纏ふ悲しい日は、餘りに速かに來てしまつた。ミル氏が眷戀した夜鶯の音調は、暗黑に充ち滿ちて居る。併し夫れは亡師の耳に取てゞはない。今や氏は、沈默の永遠に連續する、より深い暗黑の中に眠つて居る。吾々は、臨終のソクラテスが悲しみに沈める彼の友人達に與へた反省を以て、吾々自身を慰めたい。即ち中庸、正義、勇敢、尊貴及び眞理の彼に固有せる寶玉を以て、靈魂を裝飾された彼も、時到れば赴く可き黃泉への旅路を常に覺悟して居ると。

吾々は知及び德の一大先生、一大典型を失つてしまつた。併し世人は何時迄も、彼等の周圍に氏の性格の出現することを感じ、以て所謂懶惰我儘に慙愧せしめられ、又善事をなすに努めると共に、善とは何ぞやてうことを發見するに努める——是れは至難であるが——と云ふ直接に利害關係なき勞働を鼓舞せしめられるであらう。（終）

である。哲學的急進派の友人連は、ミル氏がワーヅワース（Wordsworth）を好むのを常に怒つて居た。『ワーヅワースは、貴下（ミル氏）が目下從事しつゝある戰爭に於ては、疑もなく貴下に反對である。併し貴下が一度勝利を收めた曉には、世の中はワーヅワースの資質に遙かに勝るものを要求するであらう』とは、私が常にミル氏に言ふことである。氏の青年時代に於て、單純なる宗教否定は、唯だ此點に於てのみ共通なる人々の間を強く社會的に結合する一の紐であつた。

純粹なる有神論の近代的傾向に就て話した。此純粹なる有神論の遭遇した抗議とは、夫れが眞理の問題を離れ、社會に有用なりてう反對命題に依て、一二の偉人をば社會關係に遠ざからしめたがために、其改善を延引させて居ると謂ふのに在る。勿論純粹なる有神論は、社會に取て一時的信仰として有用である。何故と云ふに人々は、人間に役立つ奉仕と、神への奉仕とを同一視するからである。從て吾々は、宗教の將來に於ける變化を容易に說明することが出來ることは、考へられないにしても、疑もなく夫れはコムト（Auguste Comte）の云へる如く、又吾々の信ずる如く、人類の共同一致に依存するであらうとは、豫期することが出來る。兎に角茲に二つの傾向があつて、此人類の共同一致は之がために宗教の道德的權威の包圍する所とならうとするのである。即ち（一）先づ、些細なる日常の行爲も、其行爲者の死後何百年何十年の間は人間に取て、一の呪詛となると云ふ恐怖す可き事實に依て、世人は次第に印象附けられるに至るであらう、（二）次に奉仕の因襲的慣習を出精に維持することに依てのみ、人間は、或は目に見ゆる或は目に見えざる恩惠者に對する彼等の